

# ボランティアにおける「利己性」と「利他性」

－語学ボランティアのケーススタディを通して－

中 田 和 子 ・ 市 川 兼 三\*

## 〈目次〉

1. はじめに
2. 文化ボランティア活動
3. NPO 法人アルプス善意通訳協会会員のボランティア意識調査
4. アンケート調査結果についての考察－ボランティアの理念と魅力から－
5. おわりに

謝辞

注・引用文献

---

\* NPO 法人アルプス善意通訳協会副理事長

## 1 はじめに

近年、その言葉を耳にしない日が無いほど「ボランティア」の言葉が巷間に溢れるようになってきている。荒廃した終戦後の日本では想像し難いことであった。しかし日本社会が豊かになるにつれて人々の生活にゆとりが生まれ始め、余裕のある人生を「自分自身のためのみに過ごすのではなく、ささやかながらでも社会に役立ちたい」と考える人の数が増加していった。

ボランティア人口の増加に伴い、その活動領域も多岐に渡るようになり、ボランティアの意識や意味合いもまた多様化していくこととなった。

こうしたボランティア多様化の中で、人々は「なぜ特定のボランティアを選択し、ボランティア活動に従事するのであろうか」を考える時、「それぞれのボランティア活動は際立った特徴や魅力を有しているからだ」と推測できるであろう。

松本市には、市の観光の中心をなす松本城を訪れる外国人観光客に外国語（主に英語）でボランティアガイドをしている「NPO 法人アルプス善意通訳協会」というボランティア団体がある<sup>(41)</sup>。筆者は1992年の団体設立以来のメンバーとして17年間ボランティア活動に携わってきた。その間、多少の増減があったにせよ、ほぼ80名近い会員が無償でガイドや通訳、翻訳といったボランティア活動に従事してきている。ALSA 会員のボランティア団体への入会動機や目的を探ることで「ボランティア」という大きな枠組みの中での特定のボランティアの特性や魅力が解明されるのではないかと考え、ALSA 会員にアンケート調査を実施した。

その結果、ボランティア活動の一般通説理念である「利他性」に相反する、ある種利己的ともいえる理念の存在、つまり「利己性」が浮き彫りにされた。

本稿では、「NPO 法人アルプス善意通訳協会」会員に実施したアンケート調査結果を基に、ボランティア活動における「利他性」と「利己性」という2つの理念の位置づけと、その2つの理念の相互関係を考察し、またそれら2つの理念と他の一般通説理念との関係の考察を進めていきたい。

### 1. 1 ボランティアの定義、理念（一般通説）、領域

ボランティアとは、「自ら進んで社会事業などに無償で参加する人」（広辞苑）、「自発的に奉仕活動をする人」（オックスフォード大辞典）であると定義されているが、これはラテン語の「自由意志」を意味する「VOLUNTAS」に由来する。「ボランティアの理念」は研究者により異なるが、川村<sup>(42)</sup>によれば、一般通説として表1の14項目に分類される。

〈 表1 ボランティア理念（一般通説） 〉

自発性	主体性	利他性	無償性	公共性	公益性	連帯性
社会性	継続性	先駆性	開拓性	発展性	福祉性	補完性

出典：川村匡由『ボランティア論』ミネルヴァ書房2006年、3頁一部変更

また、「ボランティア活動の領域」は表2の9項目に分類される<sup>(43)</sup>

〈 表2 領域別ボランティア活動 〉

① 国際平和	② 文化	③ 体育・レクリエーション
④ 保険・医療	⑤ 災害救援・自然保護	⑥ 教育・健全育成
⑦ 犯罪・更正	⑧ 障害・高齢・離別	⑨ 危機介入・相談

出典：川村匡由『ボランティア論』ミネルヴァ書房2006年、10頁一部変更

## 1. 2 我が国のボランティア活動

日本には、古くから「隣組」や、「町内会」といった地域での助け合いの精神が伝統的に存在してはいた。しかし、今日に見られるような様々な分野における幅広いボランティア活動が根づいたのは1995年の阪神・淡路大震災においてであるといわれている。

「わが国のボランティア活動は、中世からの講組織や明治維新以来の隣組、のちの町内会や自治会、青年団、婦人会、篤志家に負うところが多い。しかし、戦後は、民生・児童委員や老人クラブ、さらには社協を中心とした一般住民が参加するとともに、1995年の阪神・淡路大震災や、1998年の特定非営利活動促進法（NPO法）の制定を機に、ボランティア人口が拡大し、市民社会の形成の担い手として注目されるようになった<sup>(41)</sup>」のである。

長野県においては、1998年の長野冬季オリンピック、パラリンピックに多くのボランティアが参加し、様々な分野で活躍したことは記憶に新しいところである。

## 2 文化ボランティア活動

アンケート調査を依頼したNPO法人アルプス善意通訳協会の活動領域を大まかに分類すれば、その活動形態から表2における領域9項目の中の、「文化」に相当するボランティア活動をしていると位置づけられる。したがって本稿では表2の②の「文化」に焦点を当て、「文化ボランティア活動」としてのボランティア活動に言及していく。

「文化ボランティア活動」とは、文化庁長官の河合隼雄（2004年当時）によれば「文化芸術に自ら親しむとともに、他の人が親しむのに役立ったり、お手伝いするようなボランティア活動」を指す<sup>(45)</sup>。つまり「文化ボランティア活動」とは、奉仕や慈善活動といったこれまでのボランティア活動のイメージとは異なり、文化活動をボランティアで実行することにより、自分が追求する文化価値を高めていくボランティア活動だといえるであろう。

また、「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」が制定された1990年以降、生涯学習<sup>(46)</sup>への取り組みが活発化する中で、「この生涯学習の考え方とボランティア活動がドッキングし、楽しみながら社会に貢献する『文化ボランティア活動』がクローズアップされてきた<sup>(47)</sup>」のである。社会の高齢化に伴い、こうした「生涯学習」に対するニーズはますます高まっているといえよう。

文化庁では文化ボランティア活動を推進するため、各地域で多様な活動が行われるように環境整備を図っている。

### 2. 1 文化ボランティア活動の現状

大久保によれば、文化ボランティアの現状は大きく次の3点に分類できる<sup>(48)</sup>。

- 1 博物館、美術館、図書館などの文化施設の事業を支える活動  
ボランティア活動そのものが生涯学習であり、趣味や技術、知識をボランティア活動で生かすこと。
- 2 文化センターなど地域の文化施設を拠点にした活動  
行政と市民が協働で地域の文化を創造していくもので、自治体と市民グループがパートナーシップを組み、運営などについても協議を進める。
- 3 地域の文化を創造し、発信する自立した市民活動  
まちづくりや文化のレベルアップを視野に入れた祭りやコンサート、市民大学の開催などを実施する活動。自治体や企業、文化人たちを巻き込み、協働でつくりあげる活動。

NPO法人アルプス善意通訳協会が行っているボランティア活動は、主な活動の中心が「国宝松本城ガイド」であることを考えれば、上記1に位置づけられよう。

## 2. 2 文化ボランティア活動の魅力

大久保によれば、文化ボランティアの魅力は下記表3の8項目に分類される<sup>(19)</sup>。

〈 表3 文化ボランティアの魅力 〉

1	趣味や特技を生かし、楽しみながら社会貢献できる
2	学習や特技を深めることが出来る
3	何時でもそこに「活動の場」がある
4	継続的・日常的に出来る
5	仲間ができる
6	学び合い、気付き合いの場
7	地域がわかり、地域の文化創造に貢献できる
8	まちづくりにつながる活動

出典：大久保邦子『文化ボランティアガイド』日本標準、2004年、20-21頁一部変更

## 2. 3 語学ボランティア活動

NPO 法人アルプス善意通訳協会が「文化ボランティア活動」の分類に組み入れられることはすでに述べたが、その活動形態をさらに分析すれば、通訳（会議、イベント等）、ガイド（観光、企業案内等）、翻訳（文書、書簡等）に必要な専門知識である「語学能力」を提供していることに焦点を当てた「語学ボランティア」として位置づけられる。

日本での語学ボランティア活動は、1964年の東京オリンピック開催時にさかのぼる。いわゆる「善意通訳運動」<sup>(20)</sup>と言われるもので、約1万人が登録した。2007年12月現在、善意通訳登録者数は全国で約53,000人に達している<sup>(21)</sup>。

松本市の語学ボランティア活動は、1982年が元年となる。この年、松本市において鈴木メソッド・才能教育研究会<sup>(22)</sup>の世界大会が開催され、松本市が語学ボランティアの募集を行ったのである。約200人のボランティアが応募し、活躍した。

1986年には松本平、安曇野から大町にかけての13市町村が、「松本・日本アルプス国際観光モデル地区」に指定されたのをきっかけに「善意通訳ガイド」（グッドウイル・ガイド）を募集、上記13市町村から約210人のグッドウイル・ガイドが誕生した。当時、登録者は全国で25,000人余、市町村の呼びかけでこのような200人を越える応募は全国的にまれであった<sup>(23)</sup>。1987年には第1回全国善意通訳者の集い（SGG）<sup>(24)</sup>が松本市で開催されている。

1989年、長野県内の国際交流に積極的に取り組む民間団体とのネットワークを推進するため、長野県国際交流推進協会が設立された。1991年からは同協会により長野冬季オリンピック語学ボランティアの募集が開始され、長野市と松本市において語学ボランティアを対象に6ヶ月間の通訳強化トレーニングセミナー<sup>(25)</sup>が開始された。これ以降、通訳強化トレーニングセミナーは長野冬季オリンピックが開催されるまで継続される事となり、長野県の語学ボランティアの意気は一気に高まったのである。1991年の半期に亘る松本市での通訳強化トレーニングセミナー終了後、受講生の間から「何らかの形で語学ボランティア団体設立を」との声があがり、1992年4月、アルプス善意通訳協会という語学ボランティア団体が誕生した。2006年にはNPO 法人アルプス善意通訳協会となり、今日に至っている。

### 3 NPO 法人アルプス善意通訳協会会員のボランティア意識調査

#### 3. 1 調査概要

NPO 法人アルプス善意通訳協会会員のボランティア意識を探り、語学ボランティアとして他にない特徴を備えているかの調査をするという本稿の目的に適すると考え、アンケート調査を実施した。調査概要は以下である。

調査日時：2008年1月～2月  
 調査方法：郵送  
 調査対象：NPO 法人アルプス善意通訳協会会員  
 調査対象者の年齢：20歳代～80歳代  
 発送数74通中回答数49通、回収率は65%であった。

#### 3. 2 調査結果と分析

3. 2. 1 あなたは職業別にするるとどの項目に属しますか？ また、外国語の使用頻度はどのくらいですか？

〈 表 4 アンケート対象者の職業と外国語使用頻度 〉

① 勤務 または自営業	仕事上外国語を使っている	6名 12%
	時々使う	11名 21%
	全く使っていない	10名 19%
② 主婦	専業主婦	10名 19%
	外国語を使って仕事をしている	3名 6%
③ 退職者	仕事上外国語を使っていた	9名 17%
	使っていなかった	3名 6%

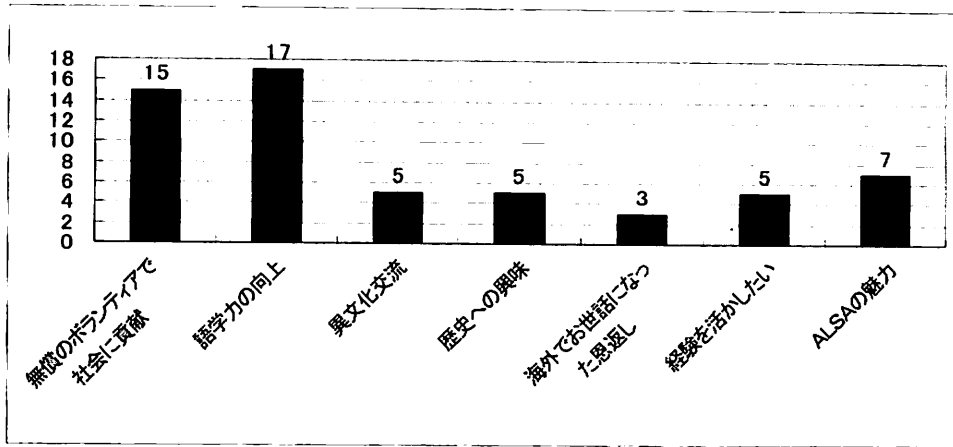
(複数回答者3名あり)

勤務または自営業で、「時々外国語を使用する」会員が最多の11名(21%)である。次が勤務または自営業の「全く使っていない」と、専業主婦の10名(19%)である。1名の差で続くのが退職者の「仕事上外国語を使っていた」会員で9名(17%)である。勤務または自営業で「全く使っていない」10名(19%)と、退職者で「使っていなかった」3名(6%)をあわせると13名(25%)となり、仕事上外国語に接しない、又は接していなかった会員は4分の1に相当する。複数回答者3名は、退職後、自営業を営んでいる、などが理由である。

3. 2. 2 ALSA 入会の動機は何ですか？

回答を自由記述形式にしたため、1名が複数の動機を挙げている場合がある。また、記述内容の類似性を考慮し、回答は以下の項目に分けてまとめることとした。

〈 図1 対象者のALSA入会動機 〉



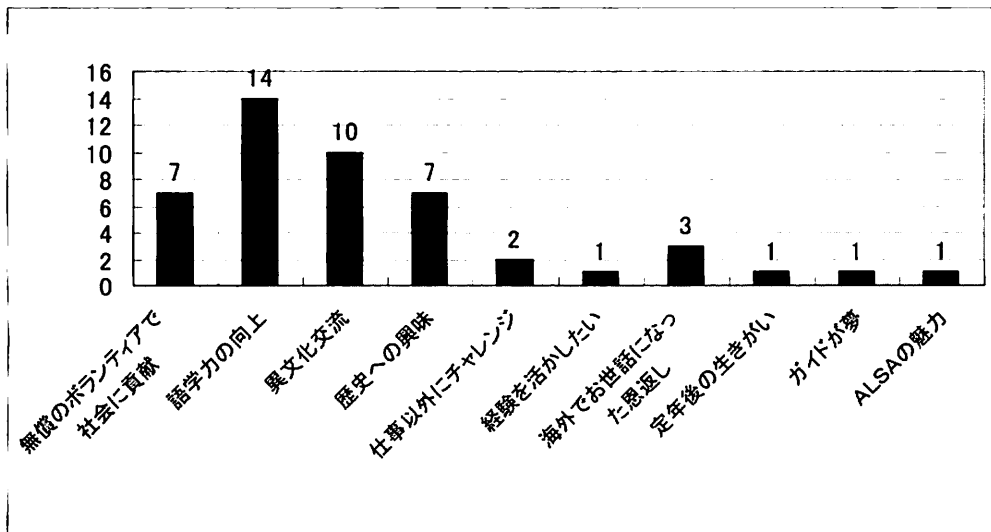
入会動機としては、「語学力の向上」が最多で17名（30%）、次が「無償のボランティア活動を通じた社会貢献」で15名（26%）であった。「ALSAの魅力」が7名（12%）で3番目となる。16年間のALSAの活動実績が評価されたものといえよう。「異文化交流」「歴史への興味（「古い木造建築への興味」を含む）」「経験を活かしたい」、が同数の5名（9%）で次に並ぶ。積極的な語学（文化）ボランティア活動参加への意気込みが感じ取れる調査結果である。

3.2.3 松本城ガイド登録の動機は何ですか？

前設問と同様、回答は自由記述形式とした。記述内容の類似性を考慮し、回答は以下の項目に分けてまとめることとした。

本問は、ALSA 会員全員が松本城ガイド登録をしているわけではないため、設けたものである。無記入者2名はガイド登録をしていない。

〈 図2 対象者の松本城ボランティアガイド登録動機 〉



(無記入者2名あり)

前問3.2.2のALSA入会動機と松本城ガイド登録動機とでは違いが見られた。ALSA入会動機と松本城ガイド登録動機との一番の相違点は、「語学力の向上」と「社会貢献」との間の開きにある。ALSA入会動機ではわずか3.5%の差であるが、松本城ガイド登録動機では15%と差が大き

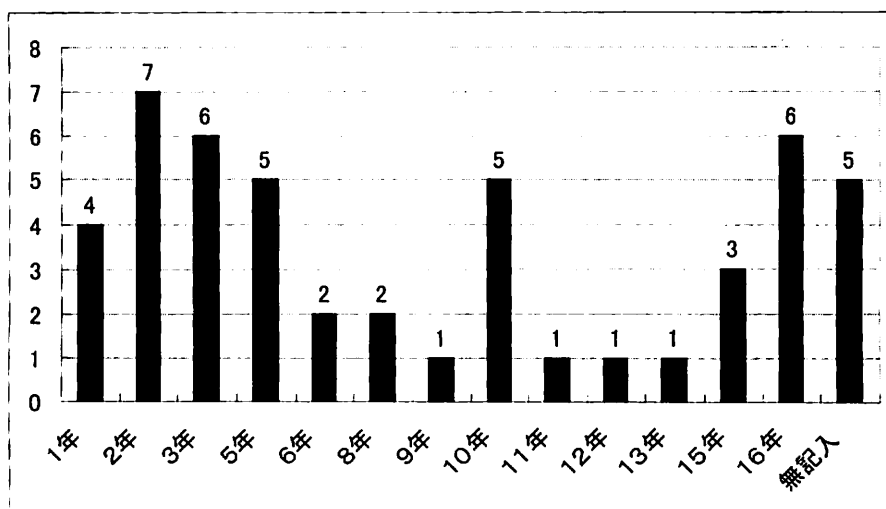
い。一方で、回答総数に対する「異文化交流」の割合は、ALSA 入会動機では 9%であるのに対し、松本城ガイド登録動機では 21%に及んでいる。

松本城ガイドをするに際しては、必然的に訪城外国人と直接的にコミュニケーションをとる事となり、また否応無く外国語を使用することとなる。松本城ガイドへの登録には、「社会貢献」よりも「外国人（異文化）との交流」を強く意識している傾向が伺われる。またその交流に伴って語学力が向上することも大きな動機付けになっていると考えられる。

「歴史への興味」も 15%にのぼっており、「語学力の向上」「異文化交流」「社会貢献」と合わせた 4 要素が、松本城ガイド登録への大きな魅力なのであろう。

3.2.4 ALSA 在籍年数は何年ですか？

〈 図3 対象者の ALSA 在籍年数 〉

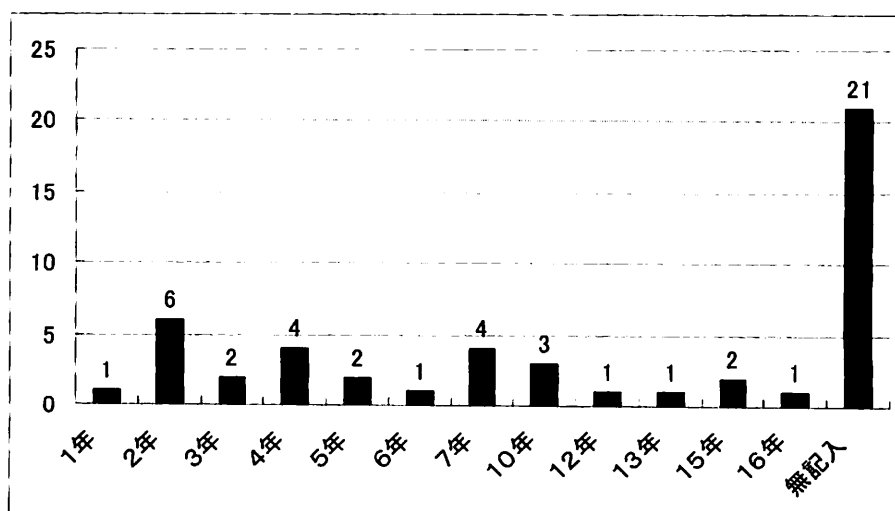


図中では、在籍年数 10 年以上が 17 名（35%）であり、10 年以上の在籍会員が 3 分の 1 強を占めていることになる。なお、創立以来の会員数は 15 名であるので、実際には 10 年以上の長期在籍会員の割合はさらに多いということになる。このことから、ALSA での活動が、長期間継続しうる魅力的なものだと推察することもできるだろう。

3.2.5 松本城ガイドに従事した年数および頻度はどのくらいですか？

① 年数

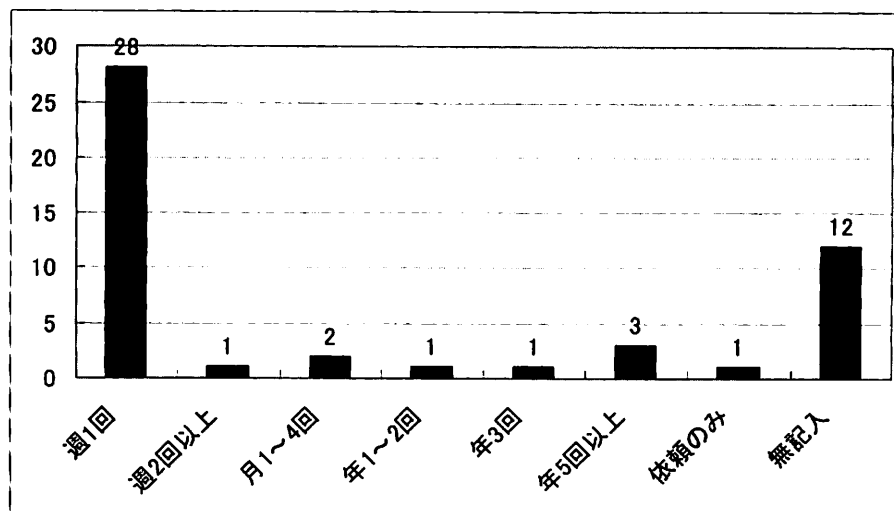
〈 図4 対象者の松本城ガイド従事年数 〉



回答者人数合計は28名で、無記入者が21名となった。これは、21名の中に、途中休会した長期会員も含まれているためである。

## ② 頻度

〈 図5 対象者の松本城ガイド頻度 〉



週1回の頻度で案内する会員が28名（57%）と最も多くなっている。これは、5月初旬から11月初旬の期間、曜日ごとに、会員が本丸庭園で待機するという曜日当番制の実施を2005年より取り入れたことによるものである。

### 3.2.6 松本城ガイドはあなたの語学力向上に役立っていますか？

〈 表5 松本城ガイドと語学力の関係 〉

かなり・とても・非常に役立っている	26名（53%）
そこそこ・まあまあ役立っている	5名（10%）
全然役立っていない	4名（8%）
わからない	14名（29%）

以下のようなコメントも寄せられた。

- \* 訪城外国人からの質問への対応や、雑談の中から英語力の向上が得られた 2名
- \* 先輩からの教示、松本城ガイドの講習会、ガイドマニュアルの勉強（ガイド英語の語彙力）など、かなり役立っている 3名
- \* 継続することで語学力を keep することが可能。関心の持ち方、問題意識の持ち方次第でいくらかでも向上できる 1名

語学力の向上に役立っているとの回答が、「かなり・とても・非常に役立っている」を合わせると26名（53%）、「そこそこ・まあまあ役立っている」は5名（10%）で、合計すると31名（63%）となり、約3分の2となる。会員の松本城ガイド登録動機がまずまず達せられている結果と考えられる。

一方、「全然役立っていない」が4名（8%）で、その中の1名は、「案内するということは語学力の向上目的ではない」と回答している。



「わからない」と回答した会員は14名（29％）であるが、コメントの記載が無く、理由の判断は不可能であった。

### 3.2.7 「語学力向上」の他に松本城ガイドを通じて得られたものはありますか？

（複数回答可）

〈 表6 松本城ガイドから得られたもの 〉

① 日本の文化をより深く考えるようになった。 （うち、「特に松本城について」が1名）	35名
② 外国人に会った時、気軽に話しかけられるようになった。	20名
③ さらに世界への関心が高まった。	20名
④ 物の考え方の違いを知ることができた。	18名
⑤ 案内をして以来、案内した海外の人と交流が続いている。	11名
⑥ その他 * 日本の城や松本城について改めて勉強でき、興味も湧いた。 日本の歴史、お城についてさらに学びたいと思うようになった。 * 自分の英語の至らなさを実感。さらに頑張ろうという気になった。 * いろいろな国の人の英語に対する接し方を考えねばならないと思った。 * コミュニケーションの難しさと楽しさを感じた。 * 息の通い合う、心の通い合うお付き合いが出来るようになった。 * 話しかけられても逃げようと思わなくなった。 * 趣味の歴史と好きな英語をマッチさせた人生の楽しさを実感している。 * 国際親善及び交流に寄与していること。	6名 3名 1名 1名 1名 1名 3名 2名
⑦ 特になし	3名

「日本文化について深く考えるようになった」が最多で35名に上った。「国宝松本城」という日本文化を代表する場所でのボランティア活動継続によるものと考えられる。外国語での日本紹介のためには、自国の文化を深く考え、知識を蓄えることが大変重要であるということであろう。次が「外国人に会った時、気軽に話しかけられるようになった」の20名である。これは語学ボランティア経験の蓄積によるものであり、小規模ではあるが、国際交流への確実な第一歩であるといえる。「さらに世界への関心が高まった」も20名で同数である。「物の考え方の違いを知ることができた」は18名である。

上記4項目からは、外国語を媒介として日本（日本文化）を紹介する過程において、自国の文化を深く考えるようになり、かつ世界を知ろうとする意欲が湧き、交流の中で、相互理解が深まっていく、という好循環が見られる。

さらに、「趣味の歴史と好きな英語を組み合わせた人生の楽しさを実感」との回答者は3名と少ないものの、ボランティア活動を通じて豊かな人生を送ることが可能であると示唆してくれたものと考えられる。

## 4 アンケート調査結果分析についての考察—ボランティアの理念と魅力から—

3章において、NPO法人アルプス善意通訳協会会員のアンケート調査結果の分析を行った。その結果を基に、特筆すべきボランティアの「理念」と「魅力」を他の要素との相互関係から考察し、

「語学ボランティア活動」従事者において殊に特徴的と考えられるボランティア意識の考察をしていく。

#### 4. 1 「ALSA入会の動機」についての考察

##### (1) 語学力の向上と社会貢献

最多回答は「語学力の向上」である。これは大久保の挙げた「文化ボランティアの魅力」の2の項目「学習や特技を深めることが出来る」に相当する。次に多いのが「無償のボランティアで社会に貢献」という回答である。「文化ボランティアの魅力」の1の項目「楽しみながら社会貢献できる」に相当する。上記2回答からは、ALSA 会員が「趣味や特技を活かし、楽しみながら社会貢献できる」「学習や特技を深めることが出来る」の文化ボランティアの2つの魅力を大いに期待しながら入会したことが判明した。しかし一方で、語学ボランティアは、社会への貢献以上に、自分の特技（ここでは語学力）の能力向上を目指し、自己の知的分野（語学）を活かしたいという意識が強いことも判明した。これは「自己研鑽意欲」とも解釈できるもので、ここに語学ボランティアの特徴があるといえる。川村が挙げた「ボランティア理念」の一般通説に照らせば、自由意志（「自発性」「主体性」）によって「無償」で社会のため（「公共性」「公益性」）、人のため（「利他性」）に貢献したいと願うのが一般的なボランティアということになるが、語学ボランティアの場合、「自己の能力を高めたい」というある種「利己的」とも言える欲求が存在し、それが他の理念を打ち消すことなく存在している。むしろ、一般通説に数えられない「利己性」がその理念の根幹をなしていると言えよう。そしてこの点こそが、語学ボランティア参加動機付けの大変大きな要素となっているのである。

##### (2) 異文化交流と歴史への興味

次にあげられるのが「異文化交流」と「歴史への興味」「経験を活かしたい」との同数回答である。大久保は「文化ボランティアの魅力」として、「仲間ができる」「学び合い、気付き合いの場」を挙げているが、これらは単にボランティア参加者内部に留まらず、外へと拡大させていくことの出来る要素であると考えられる。

語学ボランティアの場合は、海外へ出かける機会に恵まれない人でも、その語学力を通じて「世界に仲間ができて」「世界の人々と学び合い、気付き合い」ながら、異文化交流を楽しむことが出来るのである。こうした、日本にいながら地平線を拡大しての「グローバルな異文化交流」が可能であることは、語学ボランティアにとっては大きな魅力であり、海外でのボランティア活動とは趣を異にした語学ボランティアならではの魅力であるもいえよう。

また、「歴史への興味」は、街のシンボルである国宝松本城を有する松本市でボランティア活動を続けている会員ならではの回答である。その「歴史」への興味があって、それを外部（主として外国人）へ伝えることを通じて地域からさらに広がって自国、そして世界を知ることへとつながっていく。つまり、語学ボランティア参加への動機付けは、こうした「外（世界）へと拡大していく魅力」によるところが大きいのではないだろうか。

「経験を活かしたい」という入会動機は、これまで自分にインプットされたもの（経験・恩）を他者のために積極的にアウトプットしたいという意思の表れであり、この点においては「自発性」「主体性」「利他性」などのボランティア一般通説と共通するところがあると考えられる。

「海外でお世話になった恩返し」も同様である。

##### (3) ALSA の魅力

「ALSA の魅力」は、入会動機として7名があげている。ALSA は活動開始以来17年となるが、「ボランティア理念」の中では「継続性」と合致しており、また「文化ボランティア活動の魅力

力」の3の項目「何時でもそこに『活動の場』がある」、および4の項目「継続的・日常的にできる」にあてはまっているからだ、ということができらるであろう。

以上みてきたように、「ALSA 入会の動機」はボランティア理念の一般通説や「文化ボランティア」の枠でとらえられる「魅力」をさらに押し広げたものがあり、「語学ボランティア」特有の動機付けが存在することを示しているといえる。

#### 4. 2 「松本城ガイド登録の動機」についての考察

##### (1) 語学力の向上

松本城ガイド登録動機は、ALSA 入会動機とは違いが見られた。しかしながら ALSA 入会動機に比べては3名少ないものの、最多回答であったのは、同じく「語学力の向上」であった。「自己研鑽意欲」と「利己性」の理念がここでも他に勝っている事実が判明した。

##### (2) 異文化交流

次に多かったのが、ALSA 入会動機と異なり「異文化交流」だった。外国人観光客から未知の世界を学ぶことが出来るからであろうと考えられる。「日本で生まれ育ったものにとって、英語は“世界に開かれた窓”のようなものだ。英語を勉強することで世界が見える。英語を話すことで外国の人たちを知ることが出来る」と、篠田<sup>[46]</sup>は書いているが、ALSA 会員にとって、外国語（その中でも主として英語）を使用して外国人と直接コミュニケーションをはかれる松本城でのガイドは、まさに「世界に開かれた窓」となっているといえよう。「松本城ガイド」への登録者は、「通訳」というやや広範囲で焦点を定めにくい分野より、必然的に異文化を紹介せざるを得ない、焦点の定まった分野に特に興味を持つ人々であるともいえよう。

また、直接に訪城外国人のガイドをすることは、パンフレットやガイドブックでは得られない知識を提供できるという魅力があると同時に、ガイド者各自の特徴や個性を活かせるという魅力も備える。ガイドを受ける者との「連帯性」が生じる可能性も高い。文化庁長官（2004年当時）だった河合隼雄は、大久保のインタビューに答えて、「展示品のガイドだって、頼まれたらパーッとやれるようになったらものすごくいいですね。とにかく、生きた人間のガイドは、そこに会話が生まれるわけですから、国際親善という意味でもとてもいい」と述べている<sup>[47]</sup>。会話が交わされれば、心と心が触れ合う。つまり、生きた人間のガイドには「心の交流が生まれ、国際交流が生まれる」というすばらしい要素が存在するのだ。語学ボランティアには、“世界に開かれた窓”という「グローバル性」とも呼べる「ボランティア理念」も付け加えることが可能であることが4. 1と同じくここでも証明されたといえる。

##### (3) 歴史への興味と社会貢献

次に多かった回答が「歴史への興味」である。松本城ボランティアガイドの場合、単に語学力があるだけではガイドが不可能であることは言うまでもない。歴史を正確に伝えるという意識と、そのための実際の知識が無ければできないのだ。

「無償で社会貢献」は、「歴史への興味」と同数回答であった。「社会貢献」という動機付けがここに位置している実情は、一般のボランティアのイメージとは少し違うものかも知れない。そしてこの点こそが「語学ボランティア」の特徴であるといえる、ということは前項(1)でも述べた通りである。

「松本城ガイド登録動機」においては、「自己研鑽意欲」を土台とする「利己性」が「社会貢献」をかなり上回り、その差が「ALSA 入会動機」に比べ大きいという事実が判明した。

#### 4. 3 「松本城ガイドは語学力向上に役立っているか」についての考察

「そこそこ・まあまあ・かなり・とても・非常に」を合わせると31名(63%)にのぼり、3分の2近いガイド登録者が「語学力向上に役立っている」と回答している。ALSA 会員、またその中の松本城ガイド登録者、両方での第一目的が「語学力の向上」であるとのアンケート調査結果を考えれば、松本城ガイドはガイド登録者に満足できる結果を相当程度与えている、ということになる。

その一方で、「全然役立っていない」との回答も4名あり、特にその中の1名は、「案内すると言うことは語学力の向上目的ではない」と回答している。このことは、「ボランティアの本質」を考えると、重要な意味を持っている。

川村があげた「ボランティア理念」の一般通説はあくまで「一般通説」であり、全てのボランティア活動がその全ての「ボランティア理念」を充足しているわけではないのである。本稿で焦点を当てている「語学ボランティア」についていえば、ある種の「利己性」や、「グローバル性」という独特の理念があると考えられることは既に述べてきているが、それは「語学ボランティア」のあり方を絶対的に規定するものではなく、ボランティア活動に従事する個々のメンバーによっても異なることが明らかになった。

また「語学ボランティア」では、例えば「先駆性」や「開拓性」といった理念はそれほど大きなものとして見えてこないし、同様に他の種類のボランティア活動でも「この理念を重要視している」「この理念は薄い」といった、何らかの傾向があるだろう。そうした凹凸(おうとつ)は、個々のボランティア活動の「特徴付け」となっているに過ぎないのである。

そもそも、ボランティアの定義の根本は「自由意志」にある。ボランティアとは、一個人が「自由意志」をもって「自発的」「主体的」に取り組めばよいもので、何らかの「理念」や「魅力」や「動機付け」を見出しているならば、それでボランティア従事者たり得るのだ。その意味で、特定のボランティア団体(ここではALSA)の中でも、多数が持つ理念とは異なる理念を持ってボランティア活動に従事している会員がいることもまた事実なのである。活動の主たる理念に必ずしも合致しない動機付けで参加している従事者をも包含し得ているということは、それだけ健全なボランティア活動ができていているという証しでもあるのではないだろうか。

#### 4. 4 「松本城ガイドを通じて得られたこと」についての考察

最多回答は「日本の文化をより深く考えるようになった」である。この回答が提示するものは深い。ただ単に外国語が出来るというだけでは、外国の人との交流が成り立ち難いことを示しているのである。語学力を高め、外国のことにのみに興味を持ち、知識を蓄えるだけでは、自ら発信するものは限られているということを、実体験を通して感じた会員たちの回答であろう。誰しもが、まず自国の文化を知り、他国との違いに気づき、偏見を持つことなくその違いを受け入れる寛容さがなければ、真の国際人にはなり得ない。「語学力向上」を入会動機の筆頭に挙げたALSA 会員(松本城ガイド登録者)が、長年のボランティアガイド経験を通じて、「自国の文化」の大切さを学び、さらにそれを深めていこうという意欲に満ちていることは、ALSA 会員は語学ボランティアを通して、真の国際人としての得がたい素養を身に付けているといえよう。

「外国人に会った時、気軽に話しかけられるようになった」、「さらに世界への関心が高まった」、「物の考え方の違いを知ることができた」の3項目からは、上記とあわせて考えれば、ALSA 会員が語学ボランティア活動を通して、日本とは何か、日本文化とは何か、異文化とは何か、を考え、グローバルな視野から物事を見極めようとする姿勢がうかがえる。ここでも、世界に視野を広げる「グローバル性」という理念が息づいているといえるだろう。

## 5 おわりに

NPO 法人アルプス善意通訳協会会員へのアンケート調査を通じて、ボランティア意識の考察を行った結果、ALSA 会員は、ボランティアガイド活動を行うに際し、「語学力の向上」、「社会貢献」、「異文化交流」などの、共通した目的意識を掲げていることが判明した。また、これらの ALSA 入会動機を实践することにより、語学ボランティア活動に魅力と喜びを感じていることもわかった。つまり、ALSA 会員は、他のボランティア活動とは趣きをやや異にした「語学ボランティア活動」に従事しつつ、自分の持てる能力・技術を駆使して社会貢献したいと願っている人たちの集まりであるということができよう。

能力・技術は、駆使すればするほど向上し、向上した能力・技術が社会貢献度を増幅させ、そのことがまた能力・技術の向上意欲へつながらるという好連鎖を生み出しているのである。ALSA 会員は、「語学ボランティア」において特に顕著に見られる「自己研鑽意欲」「利己性」と、世界に視野を広げるといふ「グローバル性」をも兼ね備え、さらには「自国の文化・歴史の尊重」という独自の「ボランティア理念」の遂行を重ねながら自国の文化への造詣を深めているといえるだろう。

「自己研鑽」にみられるある種の「利己性」は、しかし、「ボランティア理念」の1つである「利他性」を排除することなく並立して、むしろ「利己的」ともいえる自分の能力向上の欲求が結果として「利他性」をさらに高めることにつながっていくという非常に好ましい循環がある。このことこそが、「語学ボランティア」活動の最大の魅力・喜びであり、ALSA 会員のボランティア参加への意欲を高め、ALSA 自体の17年に亘る活動の「継続」へと帰結しているであろう。

「語学ボランティア」のこうした魅力が今後さらに広がり、地域や日本、ひいては世界という大きな社会の発展に寄与することを、そして ALSA がその一翼を担うべく「語学ボランティア」活動を続けていくことを願ってやまない。

## 謝辞

松本大学「地域共同研究助成費」及び日本私立学校振興・共催事業団「私立大学等経常費補助金特別補助対象事業・知の拠点としての地域貢献支援メニュー群・地域共同研究支援」より補助金をいただいてこの研究を行うことができました。深謝申し上げます。

松本大学住吉廣行教授には原稿構成等全般に亘りご助言をいただきました。心より御礼申し上げます。

NPO 法人アルプス善意通訳協会小笠原陽一郎理事長、北上常孝副理事長はじめ、アンケート調査に快くご協力いただきました ALSA 会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

グラフ作成は藤澤雄次松本城担当理事のご協力を得ました。厚く御礼申し上げます。

## 注・引用文献

- 1) Alps Language Service Association. 通称 ALSA (以後、便宜上 ALSA と呼ぶこともある)  
ALSA の活動については巻末に詳しく説明することとした。
- 2) 川村匡山『ボランティア論』ミネルヴァ書房 2006 p.3
- 3) 川村匡山 同書 p.10
- 4) 川村匡山 同書 p.22
- 5) 大久保邦子『文化ボランティアガイド』日本標準 2004 p.10
- 6) 学齢期だけでなく、生涯にわたって学び、成長するために実施される学習。
- 7) 大久保邦子 前掲書 p.2
- 8) 大久保邦子 前掲書 pp.17-18
- 9) 大久保邦子 前掲書 pp.20-21
- 10) 日本政府観光局 (JNTO) が推奨するもので、外国語と日本語の分かる方がボランティア精神に基づき、街頭、駅、車内などで言葉が通じず困っている人を見かけた際に、自発的に通訳や案内を行う「小さな親切運動」。

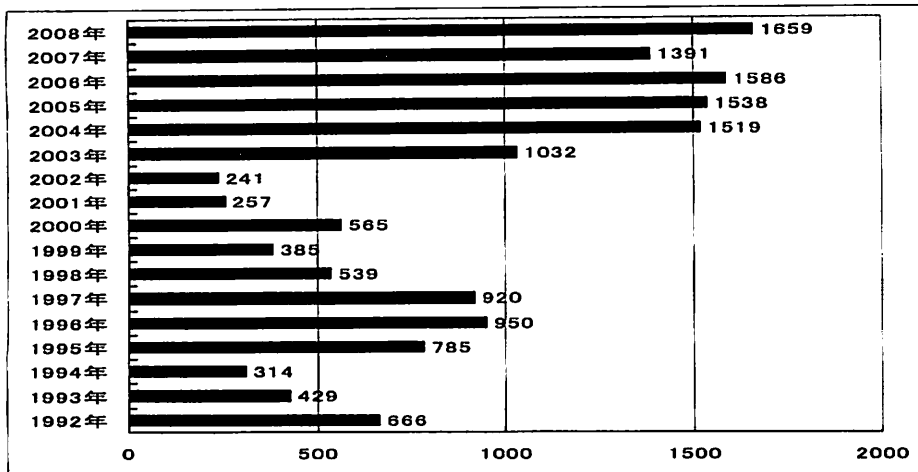
- 11) 日本政府観光局 (JNTO) による。
- 12) 1945年、鈴木鎮一氏が松本市で始めた音楽を通しての教育法。
- 13) 『信濃毎日新聞』1986, 9
- 14) SGG: Systematized Goodwill Guide. 善意通訳運動に登録した人々が、団体単位で組織を発足させたもので、現在活動中の全国組織は84組織、約3,700人が参加している。(JNTOによる)
- 15) 長野冬季オリンピック語学ボランティア養成事業として、1991年から1997年まで実施された。1991年に長野県が募集した語学ボランティアは、長野市、松本市、などからであったが、1994年には長野冬季オリンピック組織委員会として全国から募集し、25言語、5,552人が登録した。ボランティア全体としては32,579人が登録した。資料: 長野県国際課 国際交流推進係による。
- 16) 篠田顕子『ボランティア英語のすすめ』はまの出版1995 p. 4
- 17) 大久保邦子 前掲書 p. 11

### NPO 法人アルプス善意通訳協会活動概要

活動分野を以下のように分類して示すが、主な活動は、海外からの松本城訪問者への通年ガイド提供である。

国際学会・会議	第2回国際野蚕学会議 第12回国際姿勢学会 登山と高所環境に関する国際医学会議 国際植生学会 世界岳都都市会議 UNESCO 生涯学習国際会議国際山岳連盟総会 国際山岳ガイド連盟総会 サイトウキネンフェスティバルパーティー 日加官民観光定期協議のレセプション 松本市市制100周年記念事業「ウィーン展」歓迎レセプション
報道機関	The Seven Network, The Great Outdoors (オーストラリア)の上高地ロケーション New York Times 東京支局長案内 ミシュラン・ガイドブックの取材
スポーツ	車椅子テニス・ジャパンカップでの通訳奉仕 第18回オリンピック冬季競技大会 1998年冬季パラリンピック競技長野大会 ジュニア国際空手道選手権大会
案内書の外国語版作成	信州博パンフレット翻訳 日本浮世絵博物館展示物英文解説 松本城パンフレット外国語版の作成(英、ドイツ、フランス、ロシア、韓国) 松本城人形展の解説翻訳
催し物	創立5周年記念行事 (ギー・コルノー氏(カナダ)講演会) 第5回全国城案内ボランティア松本大会の開催 創立10周年記念行事
会員研修	通訳トレーニングセミナー 実用英語研修(月2回) Let's Talk in English(外国人を招いての文化交流会、月1回)
松本城の案内	松本城案内は5月初旬から11月初旬～中旬まで、本丸庭園北西隅に設置されたテントに常駐し、案内する。海外からのメール、電話などによる依頼にも同テントにて待機対応する。 上記期間外はメール、電話による依頼を受け、対応している。

〈 年度別 松本城訪問外国人の案内者数 〉



〈 過去6年間の松本城訪問外国人 国別案内者数 〉

